

# 表現と鑑賞を一体化させ音や音楽を聴く力の育成をめざした実践 —音楽構成要素を知覚・分析させ表現へ結びつけさせた試み—

新山王 政和\* 矢崎 佑\*\*

\*音楽教育講座

\*\*附属岡崎中学校

## Practice Report Aiming at Improving the Ability to Listen to Tone and Music through Expression and Appreciation Activities — This is the Trial that a Teacher Let Students Hear and Analyze a Music Component and Tie That to Expression —

Masakazu SHINZANO\* and Yu YAZAKI\*\*

\*Department of Music Education, Aichi University of Education, Kariya 448-8542, Japan

\*\*Okazaki Junior High School Affiliated to Aichi University of Education, Okazaki 444-0864, Japan

### 1 研究概要と本研究の背景

#### 1.1 研究の動機と筆者の立脚点

小中学校の音楽科授業では表現活動が多くを占めている。しかし音を出すことと聴くことは可逆的かつ不可分なものであり、他者や自己の演奏上の違いを聴き取れるから演奏表現が幅広く豊かになり、表現の技術や知識があるからこそ演奏上の変化を聴き取ることができると言えよう。そこで“知覚、分析”をコアとして表現と鑑賞を一体化させた活動によって、音の塊や音の羅列へ自分なりに音楽的意味や価値を付加しながら感情や情動を呼び起こす仕組みや仕掛けを思考判断し、それを言語活動によって他者との共通理解に高めた上で再び表現活動や鑑賞活動へ還元する実践を本学附属小学校・中学校と連携しながら模索している。

音や音楽を形づくる要素や仕組み（以下、音楽構成要素）は、表現活動のみならず鑑賞の際も同じように作用している。事実、筆者が中学校の先生方と取り組んだ先行実践では、「まず自分なりに感じ取ったり聴き取ったりしたことをグループ内で話し合い、それを互いに確認し合い疑問を投げ掛け合うことで熟成化させ、全体の前で披露し合う活動によってより確かな意見にまとめる。このような活動を通して生徒は曲を分析する力や聴取力を身に付けるプロセスを体験し、それを他者へ伝える表現力や文章力にも繋がっていったものと考える」<sup>1)</sup>という方向で集約された。この結果より、全ての音楽活動を貫く基盤は、知覚し、聴き取り、聴き分けることだと考えられる。さらに表現と鑑賞を一体化させ「演奏しながら〇〇に気を付けて聴く。演奏しているつもりで〇〇の変化や工夫を聴き取る」のように、音楽構成要素を触媒として演奏と鑑賞を融合した活動を探るべきだと考える。

#### 1.2 鑑賞で求められる音楽構成要素を知覚する力

音楽構成要素を学ぶには、それ以前に各要素へ充分

浸らせ無意識下で音を知覚させ音へ反応させる様々な原体験や前体験が行われていなければならない。言わばこの“質の良いあそび”によって芽生えた知覚力が手がかりとして音楽構成要素に気づかせ、感じ取らせて意識させるプロセス、つまり鳴り響く音と音楽構成要素を結び付けてその良さや働きを自覚させる活動を基盤とし、その学習段階を4段階に措定した。

- ①他者や自身の演奏を聴いて要素に気づき、感じ取り、意識する段階。（要素を知覚し認知する力や、要素に気づき、聴き分ける力）
  - ②他者や自身の演奏を聴いたり、練習前と練習後の演奏を聴き比べたりしてその良さや働きを自覚し、それを生かしたり際立たせたりする段階。（要素を活用した表現や鑑賞を工夫する力）
  - ③要素同士の係わりや組み合わせによって生まれる効果や働き、要素の組み合わせで形づくられる音楽の仕組みを考える段階。（全体の中で要素の働きや良さを考え、包括的に捉えて再構成する力）
  - ④気づき感じたことを自らの演奏へ結び付け、言語・非言語活動を活用して共通理解へ高め演奏へフィードバックする段階。（演奏者相互の説明力や説得力）
- ここで重要なのは、音や音楽の正体や仕組みを知っていてそれを自在に使いこなせる技術を持っていないと、より高いレベルでの音楽活動には繋がらないということである。つまり演奏者は自らの思いや意図を具現化するために演奏上の工夫を試行錯誤し、聴取者はその工夫や試行錯誤を読み解き演奏者の思いや意図を予想し推察する。よってより高い芸術性や情緒・情操の育成をめざす上では演奏者を育てることと鑑賞者を育てることは同義であり、不可分な関係にある。

#### 1.3 一連の実践研究で措定した活動モデル

鏡に姿を映すように自分達の演奏を客観的に聴くことで「気付く活動」と、模範演奏と自分達の演奏を聴き比べながら演奏表現を「磨き上げる活動」を一体化

させ音楽の聴き方の習得をめざす。その際の鏡として録音・再生が可能なスピーカー一体型のICレコーダー（JVC社RD-R1）を1研究協力校あたり平均6台ずつ確保し、児童や生徒が自由に録音再生できるよう準備した。さらに拙著「鑑賞用評価シート」<sup>3)</sup>を壁面教材として掲出および児童や生徒へ配布することで、鑑賞のみならず表現活動の意見交換や相互評価の場面、自己評価の場面などでも日常的に活用して貰った。

活動モデルの大まかな流れは次のように設定した。これは筆者の愚見である「学校教育活動の一環である小中学校音楽科の授業では『自己理解の力+他者理解の力⇒コミュニケーションを確立する力』と『計画立案力（練習の見通しや段取りをつける力）+問題解決力（必要な知識や技術、それを身に付ける力）⇒自己実現の力』を身に付けさせる」に基づいている。

- ①課題として取り上げた部分の模範演奏を聴く。
- ②同じ部分を取り出して練習する。
- ③録音して、同じ部分の模範演奏と聴き比べる。
- ④何が違うか考えながら追究課題を探し出し練習する。
- ⑤再度録音して模範演奏と聴き比べ、自分達が設定した追究課題に対する練習の成果を話し合う。
- ⑥話し合いを基にして新たな追究課題を探し出し、それに沿った練習計画を考える。

#### 1.4 音楽科授業における言語活動の位置付け

筆者は、音楽科における学びの一つを「音楽に関する知識と音響的な実体とを関連付け、体験を通して実感すること」と措定している。そして音楽科における言語活動とは、言葉や会話、記述などを介在させた音楽に関するコミュニケーションであり、音楽構成要素を巧く組み合わせる自分の思いや意図、演奏表現の工夫などを言葉に置き換えて演奏仲間と共通理解化し、曲を聴いて感じ取り聴き取ったことを他者と話し合い比較するものだと考える。今回の研究では、これを短期間に身に付けさせるのではなく、音や音楽から聴き取ったことを言葉と関連付けたり、感じ取ったことを言葉へ置き換えて説明したりするような活動を、小中学校9年間に亘って積み上げることとしている。

これについては、岡田（2009）による次の趣旨の示唆が参考になるので紹介しておきたい。

- ①「聴くこと」と「語り合うこと」とが一体になってこそ音楽の喜びは生まれる。
- ③「音楽を語る言葉を磨く」ことは十分努力によって可能になる ～略～ 音楽の「語り方=聴き方」には確かに方法論が存在する。
- ③純粋に非言語的な音楽体験というものには存在しない。

#### 1.5 鑑賞の目標として措定した習得ポイント

“演奏”や“聴く”という行為そのものが創造的な活動であることを踏まえて習得目標を措定した。

- ①聴き方のパターンや型を知る。

②聴く力・分析する力・想像する力。

③作曲者の周到な作戦を推理する力。

④制約の中で工夫された表現を推理する力。

そして、検証ポイントを次のように措定した。

- ①子ども達自身の練習の深まりに対する“録音⇔確認”の声掛けのタイミングや方法、掛ける言葉の吟味。
- ②自分達の録音と模範演奏を聴き比べて、その違いを感じ取れない子ども達へのアプローチの方法。
- ③技術指導のタイミング、それを促す働き掛け方。
- ④演奏表現を深めるための教師による指導の度合い。

#### 1.6 研究初年度に明らかになったポイント

本報告以外の附属学校における実践も含めて、次の3点が新たな検証課題として確認された。

- ①教師から働き掛けが無いと、録音した演奏（自らの演奏を映し出す“鏡”）を聴こうとしない。
- ②教師から焦点化した働き掛けが無いと、音の塊や音の連なり（重なり）として聞いてしまい、音の組み合わせを音楽として分析的に捉えることができない。
- ③音の融合から生じる情動とキャラクターの差異を関連付けて聴く活動を長く継続する必要がある。

## 2 授業実践 I の概要

### 2.1 附属岡崎中学校、矢崎佑教諭による実践

2.1.1 教材: 工藤直子作詞、木下牧子作曲「はじまり」  
(混声四部合唱): 8時間完了

2.1.2 実践学年: 3年生41名

#### 2.1.3 めざす生徒の姿（新山王による要約）

各自が曲から読み取ったり感じ取ったりしたことや、自分達の合唱を聴いて考えたことを仲間と意見交換することで、様々な表現方法の可能性があると気付く。各パート3~4人からなる声楽アンサンブル（以下、アンサンブル）での活動を中心に、考えたことを実際に歌って試し、それを録音し、相互に聴き合うことで批評し合い、自分達の演奏を深めていくポイントを明確にする。そして、それぞれのアンサンブルから提案された表現方法を学級全体で共有しながら、合唱表現をつくりあげていく姿を期待する。

#### 2.1.4 単元構想の概要（新山王による要約）

生徒は、これまでの活動により歌詞の一つ一つの意味を考えたり、旋律の形と言葉の繋がりを意識しながら歌ったりすることの大切さを実感している。しかし強弱や音程の正確さのみに意識が向いてしまうことが多く、それらの変化などが意図した細かな歌唱表現を聴き取ろうとする姿はあまり見られなかった。そこで、曲の分析から気付いたことを仲間と共有し、色々な歌唱表現を互いに演奏したり聴き比べたりすることで、考えを深めながら合唱表現をつくりあげる体験をさせたい。活動はアンサンブルを主体とし、ICレコーダーを効果的に活用して“歌って聴く活動”を繰り返

しながら自分達の意図した演奏表現が実際に歌唱に表れているのか、他によい表現方法は無いのか、新たに気付いた課題は無いのか、自分達の演奏を深めるためのポイントを明確にしようとする姿を期待する。

単元の導入では、模範演奏を聴いたり楽譜を読み込んだりすることで、作詞者と作曲者がどのような思いや意図を込めて作曲したのかという視点で各自が曲と向き合う。実際に歌う場面でも、歌ってみて難しいと感じた部分や、仲間の歌声を聴いて気付いたことを楽譜に書き込んでいく。数だけをこなす練習ではなく、仲間と係わり合う中で互いの問題を指摘し合い、高め合っていく姿を期待する。単元の後半はアンサンブルによる学習を中心として、曲の分析と演奏表現の追究を進める。その際、自分達の歌声を何度も録音して聴くことで自分達がつくり出した合唱を批評し合い、足りない部分や改善点を考える姿を期待する。また録音の聴き比べだけでなく他のアンサンブルと演奏交流することで、自分達の音楽表現上のねらいを明確にしたり、互いに助言し合ったりする姿も期待する。

自分達の演奏を録音して聴き取り、他のアンサンブルとの違いを聴き取る。この聴き合う活動を通じて様々な音楽表現上の違いを聴き取る力を養い、各アンサンブルから提案された表現方法を全体で共有しながら合唱表現をつくりあげていく姿を期待する。

### 2.1.5 単元構想の骨子（新山王による要約）

[第1時（8時間完了のうち）]

- ①生徒の思い：「はじまり」を魅力的な合唱にしたい。「はじまり」に描かれている情景を読み取る。
- ②教師の働き掛け：どのように曲を表現していきたいかを自分の言葉で伝えられるよう考えさせる。
- ③音楽科としての学び：表現の技能、鑑賞。模範演奏を聴き楽譜を読み込むことで、曲の特徴や仕組みを理解し、その働きを知覚し分析する力を高める。

[第2時～第4時（8時間完了のうち）]

- ①生徒の考え：まずは正確に歌えなければ表現まで深められない。
  - ・自分のパートを正しく歌えるようになる（第2時）
  - ・録音を聴いてパートの改善点を見つける（第3時）
  - ・全員で合うように問題点を改善する（第4時）
- ②教師の働き掛け：練習中、積極的に自分達の歌声を録音して聴き合うようにさせる。気付いたことを書き出したり指摘し合ったりすることで、常に自分達の課題を共有しながら練習を進めさせる。
- ③音楽科としての学び：表現の工夫、表現の技能。困難な部分や改善すべき技能を考え、それに気付く。

[第5時～第7時（8時間完了のうち）]

- ①生徒の考え：一つずつ視点を絞りながら「はじまり」に描かれた世界を歌で表現できるように練習しなければいけない。拘りたい部分はどこだろう。
- ②教師の働き掛け：曲の分析を通して拘りたい部分を

挙げさせ、同じ問題意識を持つ生徒で声楽アンサンブルを編成し、個人の考えを大切にしながら演奏表現を深めさせる。全曲を通して最も大切にしたい部分を全体で話し合わせ、聴き手にどのような印象を与える合唱にしたいのか、めざす方向性を全員で共有する。

- ③音楽科としての学び：表現の工夫、表現の技能、鑑賞。個人やグループでの曲の分析を基に表現を追究する。自分達の歌声を録音し互いに聴き合うことで相互に評価し合い、新たな視点から表現を深めていく。

[第8時（8時間完了のうち）]

- ①生徒の思い：合唱を聴いてくれる人に何かの「はじまり」を感じて貰いたい。
- ②教師の働き掛け：自分たちの合唱を繰り返し録音して全体で聴くことで、めざしている表現に近付いているか最後まで考えさせる。
- ③音楽科としての学び：仲間の歌唱や自分達の合唱の録音を丁寧に聴き取りながら、自分達の合唱に足りない部分に気付き、全員で指摘し合いながら具体的な注意事項や練習方法を考え、改善しようとする。

## 2.2 実践 I のまとめ

### 2.2.1 ICレコーダーによる試聴活動の前後における

#### 生徒の音楽構成要素に対する意識変化

生徒の授業日記への記述から、音楽構成要素に対する生徒の意識変化について、ICレコーダーを活用した試聴活動の前と後を比較してみたい。

#### ①ICレコーダーを活用する前

生徒の多くは歌詞や曲のイメージに関する記述や、音取り（譜読み）に関する記述を残しており、41名中、音楽構成要素に関わる記述を残したのは15名。内訳は、ピッチのずれや不安定さ、リズム（音価、音の切り方）、歌い出しのタイミング、テンポに関するもの。

#### ②ICレコーダーを導入した後

音楽構成要素に関わる記述を残した人数に変化はなし。ただし記述の内容には変化が見られ、以前は主に音とり（譜読み）に注意が向いていたものが微妙なピッチの違いや不安定さを意識するようになっていく。そこから転じてハーモニーの響き具合やハモリ方にも注意が向くようになった。リズムについても、音の切り方や休符のあり方を問うものなど、音符そのものが持つ躍動感や音符の持つ意味を意識するようになっている。強弱については、単に音が大きい小さいだけではなく、強弱の変化によって場面の違いを工夫しようとする意識が芽生えている。

印象的だったのは、「せっかく歌詞の意味とかを考えても、全く生かしていない」という記述と、複数の生徒が「歌っている時はできていると思っていても録音を聴くとイライラする」「正直、聴きたくないと思った」などの、録音を聴くことで自らの演奏に当惑する

記述が見られるようになったことだが、これこそが生徒達の“聴く耳が育った”ことの証左である。

単元後半の記述の特徴は、個人レベルやパート内の問題よりも、次に示すようなパート相互やパート間の問題へ意識が向くように変化したことである。これも“演奏中に周囲を聴く耳が育った”証であろう。

「音が変わるパートの音量も音程もはっきりしないのが問題だと思う」「パート同士でもっと聴き合いたい」「他のグループとももっと合わせたい」「パートによって発音の仕方や音符の切り方が少しずつ違う気がするので、そこいら直したい」

「アルトの音量が全体の中でもすごく小さい」「男声のパートが全く聞こえない」「バスは音域が低いので小ささがわかる。もっと響きのある声にしたい」

「テナーが他のパートよりもテンポ感がずれている」「男声パートのタイミングがとても遅く聞こえるので合わせていきたい」

さらに合唱全体を見渡した気付きや音楽表現に関わる記述が増えていることにも注目したい。これらはいずれも“合唱を全体的に聴く耳が育った”ことを示唆していると言えよう。

「音量の大小の変化がとても少ないのがおかしい」

「きれいにテンポを切り替えられるように注意したい」

「テンポが変わる部分でかなり崩れる。全員のテンポ感が揃わなければならない」「テンポの切り替えをうまくする練習をやりたい」「全然迫力を感じないのでもっと発音とテンポ感をはっきりさせたい」「テンポの切り替わりの所を揃えられる練習」「パートごとのテンポの感じ方が違う」「音程やテンポが気になり細かい表現の練習まで入れなくて残念だ」

「かけ合いのような部分はものすごくずれて聞こえる」「パート同士でかけ合いになる部分を印象的にしたいのに、ずれすぎてきたないが目立つ」

「ハモリがきれいになってきた」「アカペラの所が安定しない」「アカペラの部分で統一感がない」「少ない人数で合唱すると調和の大切さがわかる。細かい部分まで共通で理解しなければ」

## 2.2.2 音楽構成要素と表現を関連付けた記述

活動中に使用したワークシート『表現を工夫する中でポイントとなる部分どこだろう』の中には、「○○な表現をしたいから、音楽構成要素をどうしたい」などの、具体的に音楽構成要素と音楽表現を結び付けた提案が見られたので紹介しておきたい。

「速い部分と遅い部分や強弱の差をはっきりとつけて、場面の切り替わりのようなものがスパッとできると思う」「場面の変化をはっきりとつけることで、聴いている人にも緊張感のようなものが伝わるのではないかな。最後のゆっくりとなる部分にかけてのハーモニーの変化は強調したい。この部分や最後にまた速くなる所など、強弱だけでなくテンポの切り替えも重要

だと思う」「スピード感がある部分を強調するために、全体での緩急の差をしっかりと表現する。最初のアカペラが始まる部分など特にゆったり優しく歌いたい」「テンポが速い所と遅い所の差をしっかりとつけたい」

「盛り上がる所はただ大きく歌うのではだめ。小さい所まで聴き込んでほしい。女子と男子の歌声の違いを生かして表現できるかがカギ」「小さい部分をどのように歌うかも考えたい。そうすることでかけ合いやサビに向かって気持ちが高まっていくような様子が表現できるのではないかな」「現実的な部分と非現実的な部分の違いを表現できないか。強弱をしっかりとすることでそういう表現もできると思う」

「かけ合いの部分で気持ちのゆれを表現したい」

「subitoと書いてあるということは、それだけ場面の変化を表現しなければならない。全曲を通して、記号の意味もなぜ書いてあるのか考える必要がある」

以上、実践Ⅰについて新山王の所感を整理した。

## 3 授業実践Ⅱの概要

### 3.1 附属岡崎中学校、矢崎佑教諭による実践

3.1.1 教材：ジョン・ニュートン作詞、賛美歌「アメーzing・グレイス」(アカペラ)：7時間完了

3.1.2 実践学年：2年生38名

3.1.3 めざす生徒の姿(新山王による要約)

自他の歌声が持つ声域や音色に注目しながら、グループでハーモニーの響きを意識して聴き合い、歌う経験を積む。また、和音の基本的な仕組みを学びながら、和音構成音の組替(転回型)によるアレンジに挑戦する。アカペラの練習やアレンジを進める中で、獲得した知識を実際に活用して、仲間とともにめざす音の響きに近付こうと追究し続ける姿を期待する。

3.1.4 単元構想の概要(新山王による要約)

これまでの活動を通じて、歌詞に書かれた意味を読み深めたり楽譜に記された強弱記号や速度記号などを手掛かりに曲の分析を進めたりするだけでなく、音楽構成要素の働きを活用しながら音楽活動に取り組みもうとする姿勢が少しずつ芽生えている。しかし現実には各パートの音の動きや音程の違いに関する気付きが多い反面、音が重なり合って生まれる和音の響きについて触れられることはほとんど無い。また全体のバランスについても、部分的にパート間の音量バランスの大小を指摘するに止まっている。そこでアカペラ曲を題材とした取り組みを通して、各自が自分の歌声と客観的に向き合うきっかけとしたい。特に和音については、知識として楽典的に学ぶのではなく実際に響きの違いを聴き取りながら和音構成音の組替(転回型)による響きや印象の変化を感じ取ったり、それを使い分けたりできるようにさせたい。これらアカペラの練習過程において音の重なりを意識しながら歌ったり、鑑

賞においてそれらを意識したりその違いや変化を聴きとったりしながら曲を聴こうとする姿を期待する。

旋律+主要三和音で作られた「アメージング・グレイス」を用いて自分達の歌声の響きを確認し、自分の歌声と仲間の歌声を聴き分けながら練習に取り組ませる。これまで耳にしたことのある他のアカペラ曲や様々な演奏を鑑賞したり、自分達の歌声を録音して試聴したりすることで和音の転回型を工夫させ、さらに魅力的な和音の響きを求めてアカペラのアレンジに取り組もうとする姿を期待する。

### 3.1.5 単元構想の骨子（新山王による要約）

〔第1時（7時間完了のうち）〕

- ①生徒の思い：アカペラをやってみたい。
- ②教師の働き掛け：旋律と和音パートの両方を経験させることでアカペラの響きへの興味を高めさせ、授業外でもアカペラを楽しむように促す。
- ③音楽科としての学び：表現の技能。旋律と和音のパートを交替して歌うことで、それぞれの響きを味わう。自分と同じ高さの音へ耳を傾けてピッチマッチングしたり、異なる高さの音との重なりを聴き取ったりすることで、その響きや印象の違いを感じ取る。

〔第2時（7時間完了のうち）〕

- ①生徒の思い：少人数でもきれいな響きをめざしたい
- ②教師の働き掛け：録音の試聴や仲間との意見交換を取り入れ、自分や仲間の歌声に対する意識を高める。不協和音やパート間のバランスの悪さに気付かせることで、正しい音程で歌うことの大切さに気付かせる。キーボードやICレコーダーを用いて歌声を確認するように促す。
- ③音楽科としての学び：感受・工夫。表現の技能。ピッチを取ることが難しい部分や、和音が安定しない部分について考えたり、改善したりする。

〔第3時～第4時（7時間完了のうち）〕

- ①生徒の思い：旋律以外の伴奏をもっと上手に歌えるようになりたい。
- ②教師の働き掛け：主要三和音の仕組みや響きの違いを演奏することで知り、和音構成音の組替（転回型）を試行錯誤したり、和声進行を工夫させたりする。他のアカペラ曲や演奏を積極的に鑑賞するように促し、自分達のアレンジの参考にさせる。
- ③音楽科としての学び：感受・工夫。表現の技能。和音による響きの違いを聴き比べながら和音の仕組みを知る。和音構成音の組替（転回型）を工夫できる。

〔第5時～第7時（7時間完了のうち）〕

- ①生徒の思い：旋律と伴奏がきれいにハモるように工夫したい。
- ②教師の働き掛け：各グループで和音構成音の組替（転回型）を工夫したアカペラを互いに聴くことで、アレンジの奥深さに気付かせる。他のアカペラ曲や演奏を鑑賞することで、音の重なりを意識した演奏表

現工夫できるように促す。

- ③音楽科としての学び：感受・工夫。鑑賞の能力。各自の音域や声質に合ったアレンジを工夫することができる。自分達の歌声の録音を繰り返し聴き比べることでアンサンブルとしての響きにも注目し、アレンジの内容や歌い方の工夫も考えることができる。

## 3.2 実践Ⅱのまとめ

ICレコーダーによる試聴体験が生徒の音楽構成要素に対する意識変化へ与えた影響について、「授業日記」の記述から生徒の意識変化を探ってみたい。なお、本実践以前に次に記した活動を通して「音色、リズム・拍子、テンポ、旋律・フレーズ、強弱、音の重なり、形式・構造」等を有機的かつ相互に関連付けながら学習しており、そこでの学習成果も本実践へ大きく影響していたと考えられる。附属岡崎中学校の音楽科カリキュラムは、文末の資料を参照されたい。

授業日記の記述は、アカペラの特性上「音取り、和音のハモり方、パート間の強弱バランス」に関するもので占められたが、より分析的な角度から問題提起した生徒もおり、次にそれらを紹介しておく。

### ①音域の広さと音色（声色）の多彩さに注目

「パイプオルガンみたい」「高い音から低い音まで繋がっていて楽器みたい」「オーケストラみたい。低い音から高い音まで重なってすごい響きになるんだ」

ピアノに乗って歌うこれまでの合唱と異なり、旋律と伴奏の全てを歌声だけで演奏するアカペラに出会い、その音域の広さに気付くことができた。また、これまで音色（声色）や響き方を統一することに神経を遣っていた生徒が、音色の違いや個性を生かした演奏事例を知り、その良さに気付いた瞬間であろう。これらの意見に対して教師から「男声と女声の違いを楽器で例えたのは面白い。自分の歌声だったらどんな役割になれるかとか考えるのも面白い」という声掛けがあり、これが後の和音構成音の組替（転回型）を工夫する活動で音や声部の役割を考える伏線にもなっている。

### ②音のタテとヨコの関係に注目

「タイミングも合わせにくくて難しかった」「みんなとタイミングが合わせにくくて難しかった」「音が変わる所が爆発してるみたいだ」「音をとることよりもテンポを合わせるの方が難しいと感じた。ピアノ伴奏に乗って歌えないから自分自身が指揮者のように考えながら歌わなければいけない」「いつもみたいに指揮とか伴奏がある訳ではないので音もタイミングもずれてきてどうしようもなくなる」「みんな自分のパートの進みだけを考えてしまうから後に行くほどずれてしまう」「テンポもみんなに合わせて曲をすすめたい」

多くの生徒が“音の縦と横の関係”を「音の重なり

り(縦)」と「旋律・ピッチ(横)」として捉える中、もう一つの側面である「発音タイミング(縦)」と「テンポ・リズム(横)」にも目を向けることで、多角的な視野から捉えようとしていたことが興味深い。

### ③和音構成音の組替による響きや印象変化に注目

「和音の上下が一回転した感じだ」「うまくやればすごく歌いやすくなるかも」「これなら僕でも歌えるかも」「音が上がったたり下がったりしてた所が歌いやすくなった」「和音の音はそのままでも音を組み替えることで歌いやすくなるのがわかった」

「歌いやすくなったけど何か変なんですよ」「なんだかつまらなくなった」「単純すぎるって言うか」「ちょっと響きが全体的に軽くなってしまっている」「和音をいじる中でメリハリがつかなくなって響きがつまらない」「何か響きが軽くて安っぽく聞こえた」

伴奏和音パートの和音構成音の組替(転回型)を試行錯誤する中、音の動きが整理されて歌いやすくなる反面、やり過ぎると音の動きが単純化されすぎてメリハリや躍動感が失われることにも気付いていた。これに続いて出された次のような発言が興味深い。

「なんだろう、音にはそれはそれで役割と言うか意味があるんじゃないかな」「簡単にすることが本当にいいのかな」「音にはそれなりに必要性があると思う」

これらの意見に対して教師から「教会の聖歌隊が歌っているシーンがあるよ。ちょっと鑑賞してみようか」という声掛けがあり、模範演奏と自分達の歌声との響きの違いを聴き取る活動へと繋がっている。

### ④リズムに注目したアカペラらしさへの工夫

「リズムとか長さとかも変えたい」「リズムのある方がアカペラらしい」「ビデオを真似して三連符とかリズムも工夫してみたい」「ジャズっぽくリズムを入れたい」「アーと伸ばすよりリズムのある方が歌いやすい」

和音構成音(転回型)の工夫によってアカペラらしさを模索する中、教師のアドバイスでプロの演奏や他のアカペラ曲を鑑賞したことをきっかけにして、伴奏和音パートのリズムを変化させることでも、よりアカペラらしさを出せることに気付いている。

### ⑤アレンジへの興味

「曲のイメージが変わるのが面白い」「ピンとくる音の組合せがあると音楽の面白さがわかった気がした」

伴奏和音パートのリズムや和音構成音(転回型)を工夫したり、プロの演奏や他のアカペラ曲を鑑賞したりすることでアレンジへ興味を持つようになった。以上、実践Ⅱについて新山王の所感を整理した。

## 4 まとめ

実践Ⅰでは、模範演奏やICレコーダーで録音した自らの演奏を繰り返し聴いたり、それらを比較したりする活動を通じて、生徒は「知覚する力、分析する力、

表現する力」を身に付け、「〇〇な表現をしたいから音楽構成要素をどうしたい」のように具体的に音楽構成要素と音楽表現上の変化や工夫を関連付けて提案することができるまでに至った。

実践Ⅱでは、音楽構成要素と音楽表現上の工夫に止まることなく、音の重なりや繋がり、音の組み合わせ方を変化させることで、音楽構成要素がどのように楽曲演奏上の印象変化へ影響を及ぼすのかを体感し、自らのめざす音楽表現を求めて試行錯誤するレベルへ達している。

これらは正に、本実践とそれに先立って行われた諸実践を通して「知覚する力、分析する力、表現する力」を身に付けたことにより、「音や音楽を聴く力」が「音や音楽を自らの意思で楽しむ」ことへ強固に結び付けられたことに拠るものであろう。本報告の冒頭にも述べた「他者や自己の演奏上の違いを聴き取れるから演奏表現が幅広く豊かになり、表現の技術や知識があるからこそ演奏上の変化を聴き取ることができる」とことの証左であり、「鑑賞とは作品に対する能動的な働き掛け」と言われる所以でもある。

さらに真の意味での音楽鑑賞とは、音楽構成要素の変化を知覚し聴き取る力を有していることが大前提であり、その微細な動きが醸し出す音楽表現上の効果を分析して自分なりに楽しむ知識や技術のみならず、自らの表現活動にも結び付けてそれを有効活用する知識や技術を伴っていて初めて自らの中に音楽に対する心的情動や感動を呼び起こすことができるものである。それを伴わない鑑賞とは、対象物の見方や愛で方、楽しみ方、味わい方を知らないまま絵画や盆栽を見ているのと同じで、表面的にそれらを眺めているに過ぎない。繰り返しになるが、他者や自己の演奏上の違いを聴き取れるから演奏表現が幅広く豊かになり、表現の技術や知識があるからこそ演奏上の変化を聴き取ることができるのだということを、授業として行われる音楽科の鑑賞では特に意識して頂きたい。

## 5 矢崎教諭による自主実践：指揮者の立場から曲を見つめ表現を深める活動(一部、新山王により要約)

### 5.1 目的

自信をもって表現するためには、音楽の仕組みを知り、音楽を生み出したり操ったりすることの楽しさを体感することが大切だと考える。音楽構成要素の働きを表面的な知識として捉えるのではなく、それらの働きをどのように演奏に生かすことができるのか考えさせたい。そして生徒が音楽体験を通して得た気づきや疑問を追究する中で、知識や技能を習得したり活用したりする学びを繰り返し、一人一人が主体的に音楽活動に取り組むことができるようにさせたい。

## 5.2 方法

### ①生徒の実態をみつめた単元構想

2年生を対象にした実践であり、鑑賞を足がかりとしながら指揮法や合唱を含めた表現の活動と一体化させることで、7時間の授業数を確保した。生徒は、楽譜上の記号や音符についてほぼ理解しているものの、楽譜から読みとったことを演奏へ十分に生かすことができず画一的な表現に止まっている。そこでオーケストラ曲を鑑賞するなかで、複数の演奏を聴き比べ、そこから受ける印象の違いがどのような要因によって生じているのかを考えさせたい。そこで学んだことを仲間と係わり合いながら演奏へ結びつける活動を通して、生徒が主体的に表現しようとする姿を期待する。なお、本校のカリキュラムは資料を参照されたい。

### ②交響曲第5番の鑑賞から表現の多様性に気付く<sup>3)</sup>

ベートーヴェン作曲「交響曲第5番第1楽章」を鑑賞する。ここでは曲の構成やオーケストラの楽器、作曲者などの知識面での学習に終始せず、5種類の演奏を聴き比べることに時間をかけた。初めて演奏を聴き比べた際、多くの生徒はその演奏の違いを漠然と捉えて感覚的に好き嫌いを述べるに止まっていた。しかし、なぜ自分はその演奏に魅力を感じたのか、具体的な理由をあげて説明しようとした生徒は、強弱やテンポ、音の伸ばし方や強調されている楽器の音色などの音楽構成要素に注目することができた。「2番目の演奏はテンポが速く一つ一つの音が鮮明なので聴いていて迫力を感じます」と言う生徒がいれば、同じ演奏でも「私は軽い感じがするのでゆったりと演奏している4番目の方が力強さや重みがあって好きです」と応じる生徒もいる。クラス全体では、速いテンポで緊迫感のある演奏を好む生徒と、落ち着いた雰囲気の中に表現の良さを感じ取った生徒に分かれた。また「金管楽器が目立つと力強く感じ、木管楽器が目立つと繊細さを感じる」のように音色の多彩さに注目した生徒もいた。このように、演奏者によって表現にも違いが生まれることに少しずつ気付くようになり、表現方法の違いによって聴き手が受ける印象も異なることを体感した。

### ③既習の合唱曲を指揮者の視点から分析する

表現の幅広さを実感し始めた生徒は、「夢の世界を」の楽譜を見直すことにした。この曲は音楽記号が少ないため、細かい指示の無い曲だからこそ生徒が自分で表現を考えて追究しやすいのではないかと考えた。実際には「fなので大きく」、「クレシェンドを盛り上げて」のように、記号を表面的に捉えた画一的な意見に止まってしまう、鑑賞の授業で学んだことを生かすことができず行き詰まりを感じるようになる。

### ④プロの指揮者から学ぶ<sup>4)</sup>

指揮者により様々な表現が生まれることには気づいたものの、それを演奏へ生かすことが難しく、追究を進めるためのヒントを求めてきた生徒へ、プロ指揮者と出会う機会を設けた。歌い終わると同時に「今のサビの所、どうやって歌ったのかな」と尋ねられた生徒は「fと書いてあるので、大きく歌いました」と答える。さらに「どうしてそこにfが書いてあるのでしょうか」と問いかげられ、生徒達は驚きを隠せなかった。「指揮者は、どうして作曲者が楽譜に指示を書いたのか、それによって何を伝えようとしているのか、そんなことを考えながら楽譜に書かれていないことまで読み取ろうとしています」という指摘から生徒は新たな視点を得て手元の楽譜を見つめ直した。楽譜に書かれた指示を守るだけでなく「なぜ作曲者はそのような指示を出したのか」という見方から楽譜の向こう側まで読み取ることの大切さに気づいた生徒は、表現を創り上げていく新たな手掛かりを掴むことができた。

### ⑤合唱指揮に挑戦

仲間と意見を交換し合ったり、互いの指揮で歌い合ったりしながら、それぞれのめざす演奏表現の工夫を深めていた生徒は、それを伝える言葉の工夫だけでなく、指揮動作にも意識を向けるようになった。そこで愛教大音楽科学生へ合唱を担当して貰い、演奏者に対して自分の思う演奏表現をうまく伝えることができるか、どうか試してみる機会を設けた。簡潔に「全体的にあたたかい雰囲気になりたいので、やわらかい発音で丁寧に歌って下さい」と指示する生徒や、「このfはきつくならないように発音を大切に、言葉を長く歌うような感覚でお願いします」と具体的に説明する生徒もおり、各生徒が自分の考えを相手に伝えようと工夫する姿が見られた。二人の生徒による指揮を視聴した後、指揮経験の多い女子生徒が「正直に言うと、そこまで違いは出ないのではないかと考えていたけれど、今の二人の指揮を聴き比べただけでも、特にサビの部分の印象がかなり違って、二人ともしっかりと自分の考えを歌に表すことができたことがすごいと思いました」と感想を述べた。最後の生徒は「サビをのびのびと歌ってほしいです。そのためにも、そこへ向かうクレシェンドを大切に、盛り上がった所で思い切って歌って下さい」と伝えてから指揮をして、合唱した大学生から「君の指揮から、どうやって歌って欲しいかということがすごく伝わってきたよ」と評価され、自らの演奏表現に自信を持つことができた。

## 5.3 検証

音楽記号の意味について理解していてもそれを演奏表現へ生かすことができない実態をふまえ、知識を試してみる活動が必要であると判断し、まず「何に気を

つけて聴くのか」という視点を明確にした上で複数の演奏に耳を傾ける活動に取り組ませた。その結果、テンポ、リズム、強弱、音色などの音楽構成要素と曲の印象を関連付けて具体的に聴き取ることができた。その際、仲間の視点を知ることで自分もそこに注意して聴こうとする姿も見られ、「確かにこの演奏の方がフェルマータの伸ばしが長い」というようにそれまでとは異なる部分に気付くことができた。ここで得た視点を生かして、合唱曲の演奏表現を工夫する活動では楽譜上の指示の意図を探り、その指示の必要性や必然性まで掘り下げて考えようとする姿も見られた。

生徒は楽譜上の情報を調べるだけでなく、「なぜここはfなのだろうか」のように作曲者の意図を推察することができた。生徒によって理解度に差が生じたため解釈の質にも差はあったが、全員が自分で考えた分析を楽譜に書き込むことができた。既に合唱指揮の経験を重ねている生徒が、「今まではなんとなく自分の感覚で指示していたが、今ではみんなが納得できるようにしっかりと理由も説明できると思う」と記述している。このように音楽構成要素と結び付けて曲を理解する力を育てるために、鑑賞の力と表現の力の両面からアプローチする授業研究を今後も続けていきたい。

#### 5.4 まとめ

曲の仕組みや表現方法について体験を通して学ぶことで、生徒が新たな音楽の楽しさに気付くことができた。音楽構成要素は知識として教える方が容易だが、生徒にとっては実感を伴って理解するまでが難しい。今後も体感を通してそれらを身につけ、活用できる方策や教師支援のあり方を模索していきたい。

## 6 おわりに

最後に、今回の一連の研究実践に協力して頂いている矢崎教諭が研究協議会で述べた言葉を紹介しておきたい。「鑑賞を大切にしている。様々な音楽を鑑賞する際、曲の印象を意見させるだけでなく、何が原因で、なぜそのように感じ取ったのかという部分まで理由を持って語らせることを目標にしている」

演奏とは、単に音符を音へ置き換える作業ではなく、自分の音楽的表現要求というフィルターを通しながら楽譜を音楽へと再変換することである。そして鑑賞も、漠然と音を耳にするのではなく、自分の嗜好に合った音楽表現を求めながら自らの音楽的要求と照らし合わせて聴くことで心の中に生じる情動の変化を楽しむものであろう。つまり「演奏」や「聴く」という行為そのものが、既に創造的な活動を行っていることになる。今回の実践では、生徒がイメージングや思考を伴った活動をコアとしながら表現と鑑賞が一体となった活動によって様々な音楽構成要素に気付き、知り、

身に付け、改善したいと感ずることができるような活動を、そして体験と実感を通じて生徒の中で様々な音楽構成要素を意識化させ、生徒の中に内在する知識や経験知を生きた知識や技術へと結び付け変換させる工夫が随所に織り込まれていた点を高く評価したい。

鑑賞力を総括的に高めるためには、音や音楽と分析的に向き合うよう教師によって導かれる必要がある。そのためには小学校低学年から日常的に楽譜に触れさせ、楽譜に記された音楽情報から何のために、なぜそう書いてあるのか、その必要性や必然性を読み解くことが習慣になるまで教師が求め続けなければならない。特に客観的思考が可能になる中学校では、感覚的・情緒的に音楽を捉える活動と、冷静かつ分析的に音楽と向き合う活動とのバランスが大切になる。例えば、歌詞を大切にし、詞の意味やそこへ込められた情感へ迫るのは大前提かつ不可欠なプロセスである。しかし歌詞から読み取れるのは作詞者の思いや意図だけであり、作曲者が込めた思いや意図は楽譜に記された音楽構成要素を読み解くことによつてのみ迫ることができる。「詞の解釈（歌詞の読み込み）」と「曲の分析（楽譜の読み込み）」は全く異なる。よつて、小学校では歌詞を抛り所としてイメージを膨らませる活動に浸らせておくことも大切だが、中学校では楽譜と冷静に向き合つて楽譜に記された音符の動きや記号などから音楽の諸要素を読み取り、それを基にして作曲者が込めたメッセージ（思いや意図）を思考・判断し、その解釈を仲間同士で話し合つたり演奏表現について打ち合わせたりするような、分析的かつ客観的に音楽と向き合うスタイルの活動も生徒へ体験させて頂きたい。

音を出すことだけが表現ではなく、それ以前の楽譜と向き合う段階から既に表現活動は始まつており、音の動きや微細な変化から様々な音楽表現を感じ取り聴き取ることも表現活動の一部である。そして音を出す行為、楽譜を読み解く行為、楽譜と向き合う行為の全てが鑑賞活動である。このような視点から、表現と鑑賞が一体化し有機的に触発し合うような音楽活動が、今後より積極的に模索されることを願っている。

なお、本研究は日本学術振興会科研費「基盤研究(c) 23531248：新山王政和」の助成を受けている。

### [資料]

附属岡崎中学校音楽科カリキュラム（【単元名】（時数）「活動名」⇒主に伸ばしたい力の順に記載）

I 第1学年（計45時間）

①【オリエンテーション】（2時間）「学園歌を歌おう」  
⇒知覚する力：斉唱と混声合唱の響きの違いを感じ取り、音の重なりを意識する。

②【鑑賞Ⅰ 西洋音楽】（3時間）「音楽から情景を想像しよう」⇒知覚する力・分析する力：曲から受けた



印象から、作者の意図を考え話し合う。

- ③【創作表現Ⅰ】(8時間)「全身でリズムを表現しよう」⇒表現する力：色々な奏法を試し、自分たちのねらいに合わせて演奏を工夫する。
- ④【鑑賞Ⅱ西洋の歌曲】(2時間)「作者の工夫を読み取ろう」⇒分析する力：曲をとおしてどのような場面の変化が工夫されているか読み解く。
- ⑤【独唱Ⅰ日本歌曲】(4時間)「情景を思い描いて歌おう」⇒表現する力：発音や強弱などに細かく注目しながら、表情豊かに歌う。
- ⑥【混声合唱Ⅰ混声3部】(10時間)「混声合唱の響きを味わおう」⇒表現する力：これまでの経験を生かして、曲の魅力を表現する方法を考える。
- ⑦【創作表現Ⅱ】(8時間)「クラスの思いを一つの曲に」⇒分析する力、表現する力：思い描いた旋律を楽譜として形にする方法を考える。
- ⑧【鑑賞Ⅲ日本音楽】(3時間)「日本音楽の歴史に迫る」⇒知覚する力：西洋音楽と日本音楽の響きの違いを感じ取り、その理由を考える。
- ⑨【器楽表現Ⅰ】(5時間)「和楽器の魅力」⇒表現する力：楽器の特徴を学びながら楽器の響きを生かした演奏をめざす。

## Ⅱ 第2学年(計35時間)

- ①【独唱Ⅱ日本歌曲】(4時間)「作者の意図を読み解こう」⇒分析する力、表現する力：楽譜上の情報と歌詞の意味のつながりを意識して歌う。
- ②【鑑賞Ⅳ西洋音楽】(5時間)「オーケストラの魅力」⇒知覚する力：楽器の音色を意識し、曲の中でどのように生かされているか考える。
- ③【器楽表現Ⅱ】(7時間)「楽器の魅力を生かそう」⇒表現する力：演奏技能を習得しながら、楽器の特色に合った表現方法を追求する。
- ④【鑑賞Ⅴ指揮法】(3時間)「めざせ、マエストロ」(本論で照会する実践)⇒知覚する力、分析する力：表現方法によって受ける印象の違いや理由を追求する。
- ⑤【混声合唱Ⅱ混声3部】(10時間)「合唱曲の魅力を引き出そう」⇒表現する力：これまでの経験を生かして、曲の魅力を表現する方法を考える。
- ⑥【創作表現Ⅲ】(6時間)「アカペラに挑戦しよう」(本論で照会する実践)⇒知覚する力、表現する力：音程に注目し、仲間と和音をつくる中で音感を高める。

## Ⅲ 第3学年(計35時間)

- ①【独唱Ⅲ日本歌曲】(6時間)「情景を聴き手に伝えよう」⇒分析する力、表現する力：仲間と評価し合いながら、独唱による表現を深める。
- ②【鑑賞Ⅵ舞台芸術】(4時間)「音楽劇の楽しみ方」⇒分析する力：音楽が物語の場面をどのように彩るのか、その効果を考える。
- ③【混声合唱Ⅲ混声4部】(12時間)「混声4部合唱の響き」⇒表現する力：これまでの経験を生かして、曲

の魅力を表現する方法を考える。

- ④【鑑賞Ⅶ世界の音楽】(3時間)「音楽をとおして異国を知る」⇒知覚する力：それぞれの音楽の特徴を感じ取りながら、他国の音楽文化を知る。
- ⑤【創作表現Ⅳ】(10時間)「演奏会を開こう」⇒表現する力：3年間の経験を生かして自分の表現したい内容を考え、それに適した音楽活動を構想し発表する。

## [注]

- 1) 拙著『改訂版・新しい視点で音楽科授業を創る！～新学習指導要領を先取りした実践方法～』、スタイルノート、2011において事例を紹介している。
- 2) 前掲書1)のp.138に示した「鑑賞用評価シート」を児童や生徒へ配布、または拡大コピーを教室内に掲示して貰い、鑑賞や表現の活動、意見交換や相互評価、授業おわりの自己評価など、様々な場面において日常的に活用してもらった。
- 3) この実践の前半部分は、前掲書2)で紹介した中野直幸教諭による実践の追検証である。
- 4) 田中祐子：愛知教育大学、東京音楽大学卒業、東京藝術大学大学院修了。第51回ブザンソン、第5回ショルティ国際コンクールにおいてセミファイナリスト。

## [参考文献(副題省略)]

- \* 岡田暁生『音楽の聴き方』、中公新書、2009
- \* 岡田暁生・安岡洋編『文学・芸術は何のためにあるのか?』、東進堂、2009
- \* 國安愛子『情動と音楽』、音楽之友社、2005
- \* 兼平佳枝「思考力育成からみた中学校創作授業の現状と課題」、北海道教育大学紀要教育科学編59、2009a
- \* 兼平佳枝「日本の学校音楽教育における音楽的思考の展開過程」、北海道教育大学紀要教育科学編60、2009b
- \* 谷口高士編著『音は心の中で音楽になる～音楽心理学への招待』、北大路書房、2000
- \* 坪能由紀子・伊野義博『小学校学習指導要領の解説と展開』、教育出版、2008
- \* R.バーンカット、G.E.マクファーソン編(安達真由美・小川谷子訳)『演奏を支える心と科学』、誠信書房
- \* 季刊音楽鑑賞教育 vol.1、2010～vol.7、2011、財団法人音楽鑑賞教育振興会
- \* 「生き方の探求、研究のあゆみⅠ」、愛知教育大学附属岡崎中学校、2012
- \* 「平成24年度生活教育授業研究会—ともに授業を語る会—」、愛知教育大学附属岡崎中学校、2012
- \* 国立教育政策研究所教育課程研究センター報告書「特定の課題に関する調査(音楽)調査結果(小学校・中学校)」、2010
- \* 文部科学省『小学校学習指導要領解説音楽編』、教育芸術社、2008
- \* 文部科学省『中学校学習指導要領解説音楽編』、教育芸術社、2008

(2012年9月10日受理)